

# 大分県日田市方言の可能表現

## ～通信調査結果による世代差・地域差～

松田美香

### 1. はじめに

本稿は、大分県西部の日田市で行った世代別調査の結果とその考察である。以前、大分県各地の地域差・世代差調査<sup>1</sup>を行ったが、その中で日田市の結果は他地域と大きく異なるものであった。

拙稿(2001)<sup>2</sup>で大分県方言の可能表現に着目して以来、九州方言研究会(2004)<sup>3</sup>への参加、さらに大分県挾間町での世代調査を経て、2004年から通信調査を行い、大分県各地の世代差調査、大分市の高校生調査<sup>4</sup>を報告し、複数の可能表現形式各々の形式が意味するところ、可能表現の意味構造を探っているのであるが、2004年の日田市通信調査の結果はいわゆる「きれいな」分布を示していた。

具体的に述べれば、「飲メレル」「行ケレル」などのいわゆる二重可能形が県下では盛んに使われるのであるが、各地でその意味が「拡散」しているような分布状態であったのに対し、日田市では可能の条件が「体調」や「気分」によるものという意味に「収斂」していた。しかも使用者数が少ないという点も県の他地域とは異なるものであった。

この結果を検証するために、2007年2～3月に再度同様の調査を日田市内各地で行った。

### 2. 目的

2004年秋に行った大分県方言の可能表現における地域差・世代差調査の日田市の結果をあらためて検証するために、同市内で再調査を行う。そしてその結果から、日田市内での可能表現の意味構造を明らかにしようとするものである。同時に、もし他地域との差があることが明らかになった場合、その理由を考察する。

### 3. 方法

- ①調査票は2004年調査のものと同一にした。ただし、項目番号21番の選択肢にミスプリントがあったので、そこを訂正したものを用いた<sup>5</sup>。
- ②調査法は、通信調査。市内3箇所(隣接していない)の中学校宛てに5家族用のアンケートを配布した。予想される形式をあらかじめ印刷しておき、使う形式に丸をつけてもらう方式である。各自に返信用封筒を用意し、終わり次第投函してもらうようにした。
- ③被調査者は、その土地に生まれたときから居住し10年以上の外住歴のない、中学生、その親、その祖父母。内訳は、  
中学生(若年世代)15人(男女比 9:5 不明2)、生年1994(平成6)～1991(平成3)年

親世代 (中年世代) 15人 (男女比 3:11 不明1)、生年1967 (昭和42) ~1957 (昭和32) 年

祖父母世代 (高年世代) 15人 (男女比 6:9)、生年1939 (昭和14) ~1926 (大正15) 年となった。回収率は100%<sup>6</sup>。

#### 4. 結果

全形式・全世代総合の結果は図1を参照。

調査項目については松田 (2006) と同じである。

「能力可能」…動作主体体の能力 (生得・後天的どちらも) による可能/不可能

「心情可能」…動作主体体の心情的な条件 (恐怖の有無や勇気の有無など) による可能/不可能  
以上、2つの可能の根拠にはある程度の恒常性が認められる。

「内的条件可能」…動作主体内の一時的な条件による可能/不可能 (体調や気分など)

「外的条件可能」…動作主体外の状況による可能/不可能

この2つの可能の根拠には必ずしも恒常性は認められず、通常は「一時的なもの」と捉えられる。

また、一段活用および二段活用動詞については、いわゆるラ抜き可能形と二重可能形が同形になっている可能性があるため<sup>7</sup>、調査項目から除外した。

調査票番号01~06…外的条件による可能表現の文。(ラ)レル形<sup>8</sup>が予想される。

【動詞の未然形+(ラ)レル/(ラ)レン】

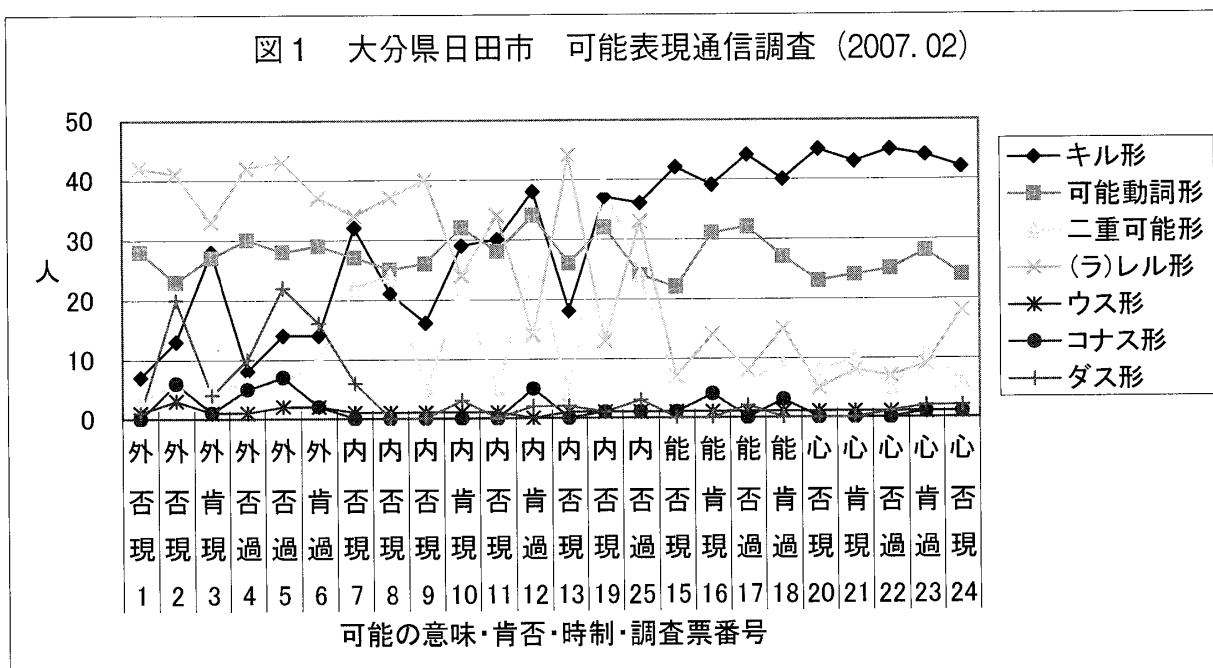
07~13, 19, 25…内的条件による可能表現の文。二重可能形が予想される。

【可能動詞の語幹+(レ)レル/(レ)レン】

14~19…能力による可能表現の文。キル形が予想される。【動詞の連用形+キル/キラン】

20~24…心情による可能表現の文。キル形が予想される。【動詞の連用形+キル/キラン】

その他に当該地域では、いずれも動詞の連用形に接続する「ウス (オース) /ウセン (オーセン)」「コナス/コナサン」「ダス/ダサン」の形式も予想されたので、選択項目に入れた。



この結果から、(ラ)レル形とキル形が左右対称をなすこと、可能動詞形が30人前後の使用で一定して使用があること、ほぼ中央の「内的条件可能」項目では(ラ)レル形・キル形・二重可能形が激しく上下し、複雑な様相を呈していることなどがわかる。以降、先行研究の結果などと照らし合わせながら、当該地域の可能の意味と形式の結び付き、その変遷などを考察していきたい。

## 5. 形式についての考察 (全世代総合)

### 5-1. (ラ)レル形とキル形の意味分担について

結果がやや複雑な「内的条件可能」の項目を除き、(ラ)レル形とキル形の結果を取り出してみると、図2のようになった。(ラ)レル形が「外的条件可能」を担当し、キル形が「能力可能」「心情可能」を担当していることがわかる。

3番「車があるので早く来ることができる」は45人中28人がキル形を使えると回答している。2004年の調査結果も同様であったので、これは日田市地域だけ

の現象ではない。九州方言研究会(2004)を見ても<sup>9</sup>、27地点中長崎県長崎市、福岡県小郡市で併用だが「キーキル」「キキル」の回答がある。おそらく「車があるので」という根拠が「外的条件可能」としては周縁的なため、このような結果になったと思われる。

### 5-2. 二重可能形について

二重可能形が「内的条件可能」の範囲内で激しく上下していることがわかる(図3)。値が低いのは9, 11, 13番である。いずれも可能の根拠が「ケガ」となっているという共通点を持つ。

九州方言研究会(2004)では「内的条件可能」の意味、「動作主体内の一時的な条件による可能/不可能(体調・気分など)」の中に「ケガ」を入れている。しかし、「ケガ」は「動作主体内の一時的」な要素と言えるか否か、再検討の余地があり、2004年秋の大分県各地の調査結果からは、「ケガ」のような可視的要素は「内的条件」の意味範疇に入らないようだと言った<sup>10</sup>。

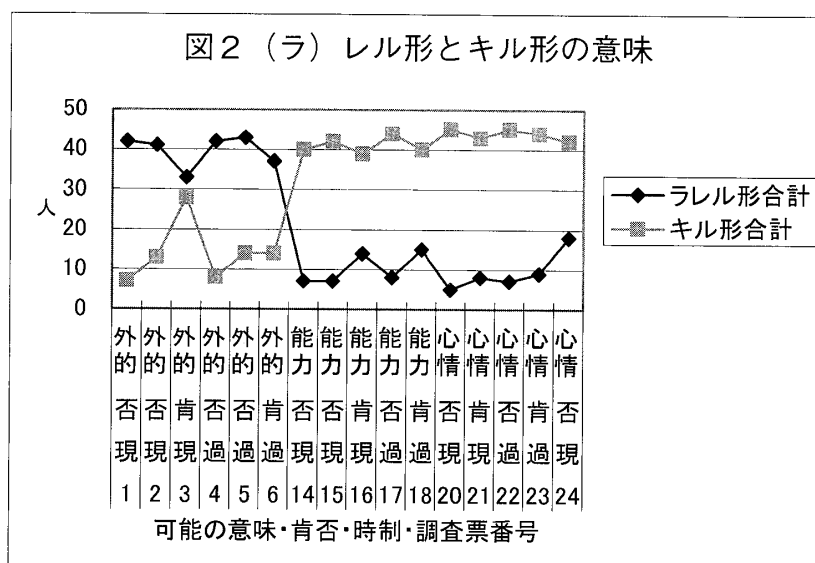
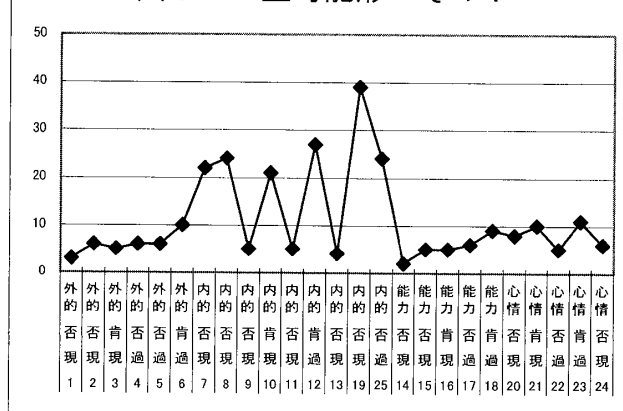
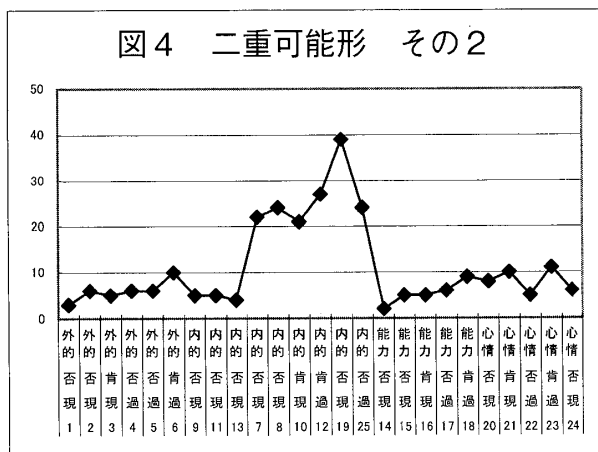


図3 二重可能形 その1



2004年から、調査項目9番、13番に「私は足をケガして泳ぐことができない ※わりと大きなケガで、包帯を巻いている状況を考えてください」と注を書き添えている(13番は動作主体が太郎)。11番は「(ケガをしていながら水に入って泳ごうとしてみてもうまくできずに)やっぱり泳ぐことができない」としたが、9番と同様の「ケガ」と受け取った人が多かったようだ。

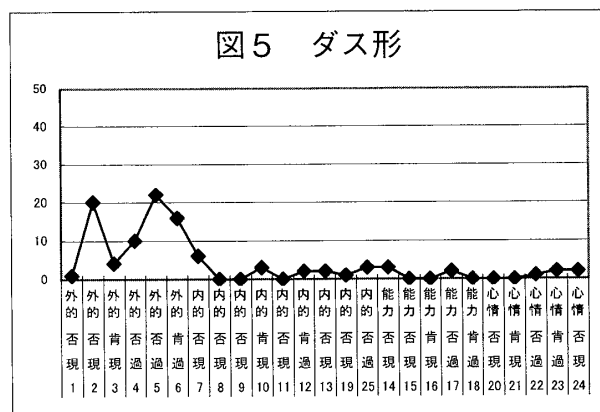


結果を見ると、上記3項目は(ラ)レル形の値が高く、二重可能形の値が低い。よって、これらは「外的条件可能」に含めるべきと考えられる(図4)。

二重可能形では、19番「(すでにお酒をたくさん飲んでいて)もうこれ以上飲むことができない」において、値が最高点に達する。このことから、二重可能形のプロトタイプの意味<sup>11</sup>はやはり「動作主体内の一時的な条件による可能/不可能(体調や気分など)」であり、可視的あるいは客観的に把握できる「ケガ」は「動作主体外」の要素と位置づけることで整理できる。

5-3. ダス形について

2番「時間がなくて行くことができない」、5番「きのうは用事があって郵便局に行くことができなかった」、6番「きのう時間ができてやっと郵便局に行くことができた」の値が比較的高い。いずれにしても「外的条件可能」に分布が偏っており、その中でも可能の根拠が「時間や用事」であると使いやすいようである(図5)。神部(1992)<sup>12</sup>によれば、ダス形は、九州のほぼ全域にある「機会可能ともいふべき」可能表現であり、「努力の結果のぎりぎりのところで、機会を得るか否かに焦点をおく表現法」と述べられている。確かに、先に述べた3番「車があるので早く来ることができる」や4番「きのうは便せんがなくて手紙を書くことができなかった」にはその意味を読み込み難い。ダス形は熊本、長崎、福岡、鹿児島 の例があり、大分県内でも直入郡(今の竹田市)の例が載っている。日田市方言のダス形も同様の意味と考えるとよいと思われる。



また、7番「今日は体調が悪いから仕事に行くことができない」にも6人が使用すると回答しているように、固定的使用には至っていないものと予想される。

5-4. 「内的条件可能」を表す形式について

図6は5-2で「内的条件可能」から外した3項目以外の6項目の結果である。(ラ)レル形、キル形、可能動詞形、二重可能形が混在しており、その中でもキル形と可能動詞形が優勢である。「内的条件可能」の意味を担当すると予測した二重可能形は、19番以外はキル形や可能動詞形に及ばない。(ラ)レル形は19番以外の否定形の値は高く、肯定形では低くなる傾向が見られ

るが、用例が少ないので何ともいえない。

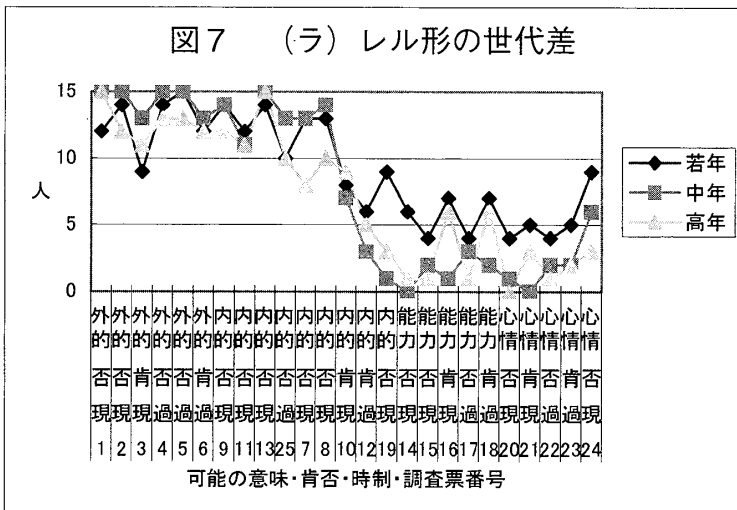
以上からわかるように「内的条件可能」を表す形式を1つだけ選ぶことはできない。二重可能形の19番は45人中の39人で86.7%であり、決して低い値ではない。しかし、キル形や可能動詞形の値がほぼ同じくらいということは、意味の区別はもはや明確ではないと考えるべきであろう。

今回の調査は世代差も見ることができるので、次に世代差の結果によって、「内的条件可能」を表す形式の変遷を明らかにしたい。

## 6. 世代差についての結果および考察

### 6-1. 世代差の結果

#### 6-1-1. (ラ)レル形の世代差

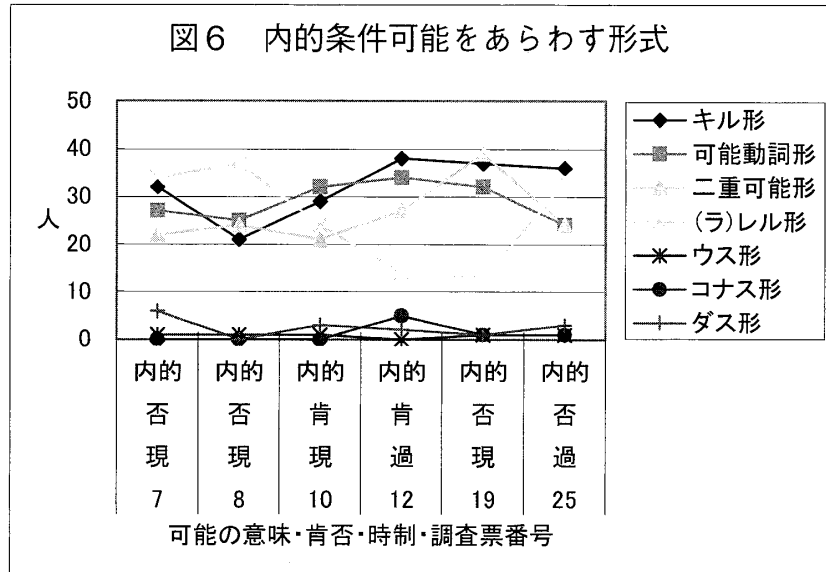


以降の作図にあたっては、「内的条件可能」の項目の並び方を変更した。9, 11, 13番は5-2. で述べた通り、「ケガ」が「外的条件可能」の要素に入るので左に移動した。次に25番も左に移動した(図7)。25, 7, 8番はいずれも「体調・気分の悪さ」によって「できない」というものであり、否定形であるということが、(ラ)レル形を使いやすくしていると思われる。世代差を見ると、使い分けが明確なのは中年代であり、若年代ではその差は少なくなっている。

高年代は中年と若年の中間くらいといえるだろうか。

#### 6-1-2. キル形の世代差

若年代は「外的条件可能」から「心情可能」に向けて次第に上っていくように見えるが、3番を除けば、「内的条件可能」から上昇している。中年代は上下に揺れが激しいが、それも「能力可能」と「心情可能」に入ると高めで安定している。高年代は中年代とほぼ同様である。このことから、キル形は、「能力可能」と「心情可能」の意味を担当しつつ、「内的条件可能」、「外的条

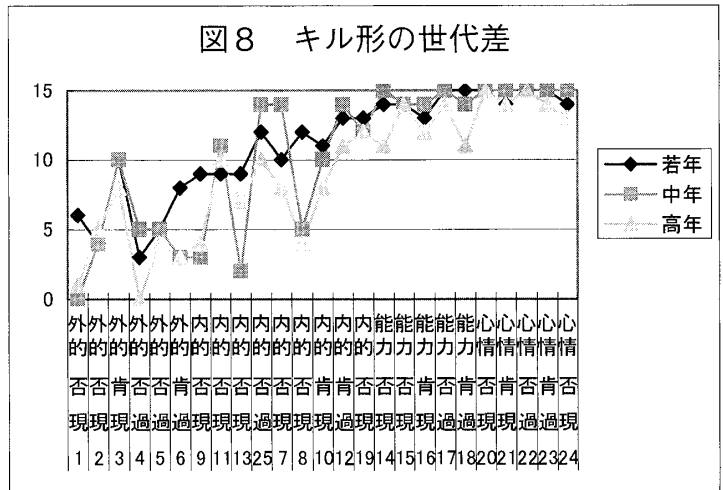


件可能」の順に、勢力をのばしていると考えられる (図8)。どのような条件がキル使用に変化しやすいか、さらに多くの用例で調べてみる必要がある。

6-1-3. 二重可能形の世代差

若年代の場合、19番「(すでにお酒をたくさん飲んでいて) もうこれ以上飲むことができない」が極めて高い値であり、他の「内的条件可能」の値も比較的高くなっていることがわかる。中年代では19番以外の25, 7, 8, 10, 12番も50%以上の使用率がある。高年代も中年代とほぼ同様である。

図9を見て明らかなように、二重可能形は19番をはじめとする「内的条件可能」を担当する形式だったが、世代が下になるにつれて衰退しつつある。一方、若年代の「外的条件可能」での使用が微増している。



6-1-4. 可能動詞形の世代差

図10を見ると、若年代、中年代、高年代の順に値が高い。しかし、中年代と高年代はそれ程の差がない。また、若年代と中年代は上下のしかたに共通性が見られるが、高年代はそれとはやや違う。2004年秋の調査の平均と比べると、若年代はほぼ同じ、中年代はやや低く、高年代はやや高い。2004年の同調査における日田市の結果は、高年代には可能動詞形がほとんど使用されていないというものだった。日田市でも地域差が大きいということなのか、それとも通信調査の方法に問題があったか、今後この点を臨地調査によって確かめなければならない。

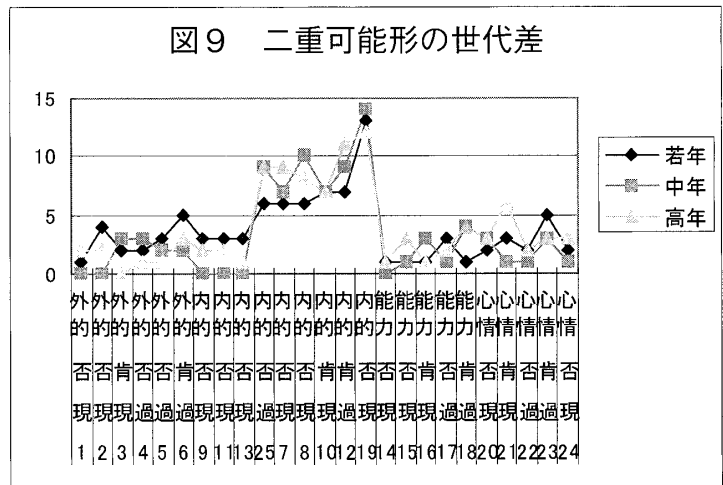
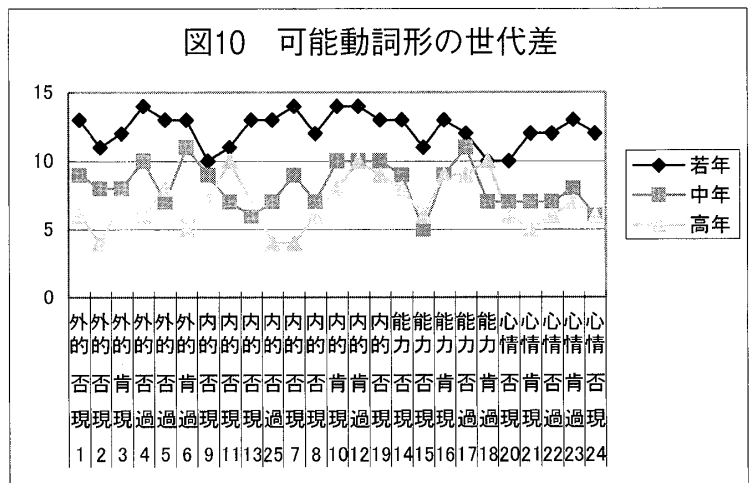


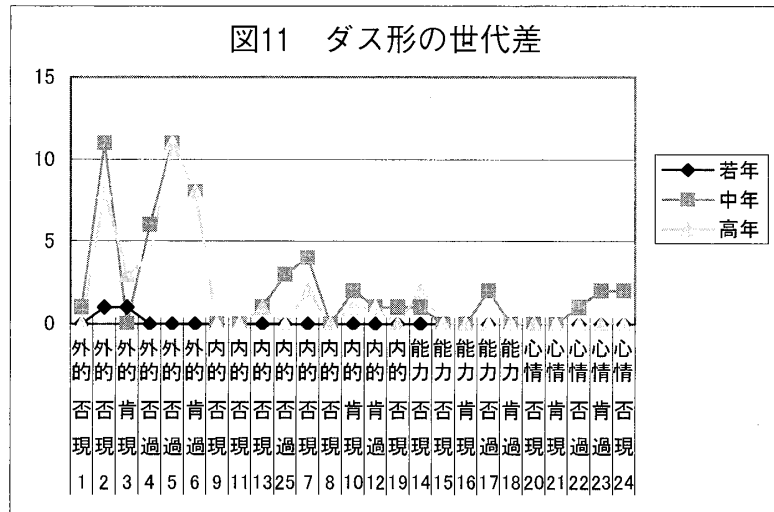
図10 可能動詞形の世代差



6-1-5. ダス形の世代差

今回、ウス形とコナス形も調べたが、分布や世代差を見られるほ

どの使用数がなかったため、結果は割愛した。図11にダス形の世代差についてのグラフを示す。



ダス形においては世代差がはっきりしており、2, 4, 5, 6番を中心に高い値を示すのは中年代と高年代で、若年代はほとんど使用がない。また、中年代には他の可能の意味にも使用があることから、広範囲に可能／不可能を表すことができた時期があったと推測される。しかし、近年ははっきりとした衰退傾向にあることは、2004年秋の調査からも結論づけられる。

しかし、近年ははっきりとした衰退傾向にあることは、2004年秋の調査からも結論づけられる。

6-2. 日田市の可能表現の変遷

6-1で見たように、キル形は勢力をのぼしつつあり、(ラ)レル形は意味の区別が曖昧になっている。二重可能形は「内的条件可能」を意味するという点では衰退傾向だが、主に「外的条件可能」への若年代の使用が増えている。たとえば大分県豊後高田市では、若い世代で二重可能形が特に担当する可能の意味を持たず、可能全般を担当するようになっている。その傾向がわずかながら見られる。また可能動詞形が若年で全体的に80%を超えている。前回の調査とは異なり、高年代にも可能動詞形の使用が50%程度あった。木部 (2004)<sup>13</sup>に「大分県における可能動詞は比較的新しい形式ではないかと思う。」とあるが、まだ結論は下せない。

拙稿 (2006) では、「可能の根拠」として「動作主体内の恒常的な条件」、「動作主体内の不可視的で一時的な条件」、「動作主体外の一時的な条件」としたが、そこに今回の日田市の結果を当てはめてみる (表1)。

表1 大分県日田市の世代差 (可能表現体系)

※ [ ] 内は、主たる使用ではなく、一部にかぎられている使用。

可能の根拠/世代	高年代	中年代	若年代
1. 動作主体内の恒常的な条件	キル形 〔可能動詞形〕	キル形 可能動詞形	キル形 可能動詞形
2. 動作主体内の不可視的で一時的な条件	二重可能形 キル形 〔可能動詞形〕	二重可能形 キル形 〔可能動詞形〕	キル形 可能動詞形 二重可能形
3. 動作主体外の一時的な条件	(ラ)レル形 〔ダス形〕	(ラ)レル形 〔ダス形〕可能動詞形	(ラ)レル形 可能動詞形

動作主の内↑外↓

時間の流れ→

日田市の可能表現においては、二重可能形の意味の拡散が見られず、他の形式に押されながらも何とか「内的条件可能」のみを表している状態である。この点が大分県の他5地点と大きく異なるところだろう。キル形が1の意味から2へ勢力を伸ばしているのは他地点と同様、可能動詞形の1, 2, 3への進出(可能の意味全体をカバーする)も同様と言えるだろう。以上から、日田市の可能表現は大分県の他地点よりも三区分の名残がある、少し時代を遡った大分県方言の姿を残しているといえることができる。

## 7. まとめ

大分県日田市の可能表現を世代別に調べることにより、二重可能形の意味範囲は確かにあり、それは「動作主体内の不可視的で一時的な条件」であることがわかった。しかし、世代が下がるにつれ、キル形や可能動詞形がこの意味範囲に勢力を伸ばし、二重可能形の棲家は明確に区分されたものではなくてきている。ダス形の分布は、中年代までは広く可能表現を表していた痕跡を残しながらも、今では「時間や用事」に関係する場合しか使用がない。さらに若年層でははっきりと衰退していることがわかった。

大分県の中でも、日田市の可能表現体系は三区分の名残があり、県北の豊後高田市や県中部の由布市挾間町と比べると古いものである。ただ、現在はキル形と可能動詞形が勢力範囲を広げてきている。キル形は隣接する熊本県や福岡県から伝播してきたものであり、現在使われている可能動詞形は中央からの伝播だともおられるが、大分県日田市においてはどちらの言葉により威信があるか、それによって結果が決まるのではないかと予想される。

### 【付記】

本調査を行うにあたり、日田市教育委員会 学校教育課の協力で高い回収率を得ることができました。心より感謝申し上げます。また、アンケートに答えてくださった日田市立東部中学校、北部中学校、戸山中学校の皆さんとその御家族にも、この場を借りて御礼申し上げます。

### 註

- 1 松田美香 (2007a) 「大分方言における可能表現の地域差・世代差～通信調査の結果および考察～」『別府大学紀要』第48号 別府大学文学部、同 (2006) 「大分方言における世代差の追究～2004年可能表現通信調査から～」『別府大学国語国文学』第48号 別府大学文学部国文学科
- 2 松田美香 (2001) 「地域から発する可能表現の3区分化～大分県方言の可能表現についての一考察～」『地域社会研究』第4号 学校法人別府大学地域社会研究センター
- 3 九州方言研究会 (2004) 『西日本方言の可能表現に関する調査報告書』
- 4 松田美香 (2007b) 「大分市の高校生の可能表現について～大分県立西高等学校におけるアンケート調査(平成18年6月実施)結果報告～」『地域社会研究』第14号 学校法人別府大学地域社会研究センター
- 5 調査票は注1 (2007a) を参照されたい。
- 6 日田市教育委員会学校教育課のご協力による。
- 7 例えば、食べ+レルは食べ+ラ+レルからの変化とも食べ+レ+レルからの変化とも考えられ、どちらかに決定するきめ手がない。
- 8 今回は一段動詞を入れなかったため、いわゆる未然形接続でレルに続く形であるが、二重可能形との区別を



考え、(ラ)レル形と表示することにした。

- 9 注3に同じ。79ページ参照。
- 10 注1に同じ。
- 11 典型的・原型的の意味。認知意味論の用語で、意味に中心的意味と周辺の意味を持つ場合があるとする。
- 12 神部宏泰 (1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書店
- 13 木部暢子 (2004)「九州の可能表現の諸相-体系と歴史-」『国語国文薩摩路』第48号 鹿児島大学法文学部国語国文研究室 pp. 127 - 140

### The Potential Forms of Hita Dialect in Oita Prefecture

~The Regional and Generational Difference Found in a Three-Generation Questionnaire Survey~

This 2<sup>nd</sup> survey in Hita was carried out in Feb 2007. The 1<sup>st</sup> survey in Sep 2004 showed that Hita Dialect had the most fixed relation between the form and meaning. The number of sample, however, was so small that the 2<sup>nd</sup> survey was conducted. The result of this survey shows that [-kiru] has expanded the range of the meaning.

A new finding in this survey is that [-e (re) reru] in Hita Dialect still keeps the meaning, “As for A, ... is possible according to his/her situation at the time,” whose condition has the element of “invisible.” [-kiru] and possible verbs, however, are making their ways into this semantic domain.

The semantic structure of potential forms in Hita was older than any of those in other areas that I surveyed before.